

パキスタンの政治文化についての一考察

玉木智宏(東海大学大学院政治学研究科博士課程前期)



私は10月10日に行われたパキスタン総選挙の監視活動を行うため、同月4日から13日までパキスタンに滞在した。選挙は、その関連で死者が出た地域があったものの、監視した地域ではおおむね平和的に行われた。ただ多くの法的問題が存在し、決して自由で公正な選挙が行われたとは言えないと思う。また我々の常識では理解しがたい現象も見られた。

パキスタンと言えば昨年アメリカで発生した同時多発テロ以降、アメリカ軍によってアフガニスタンを実効支配していたタリバンとテロ組織アルカイダ掃討作戦が行われ、アフガニスタン攻撃における重要な地域となっていた。1998年の核実験実施によって各国から経済制裁を受けている最中であつたが、この掃討作戦に協力することで経済制裁を解除され事実上国際社会に復帰した。国内にタリバン支持者を多く抱えるパキスタンではあつたが、アメリカと協力しなければテロリストと協力する国家と見なされる異常な状態であつたため、復帰したと言うよりは、協力するか否かというものしかパキスタンに与えられた選択肢がなく、生き残っていくためには協力するという選択肢を選ぶより他にはなかったと言える。それゆえにアフガニスタンへの攻撃が始まってから、パキスタン国内でのイスラム原理主義勢力によるとみられる爆弾テロが多発し、治安は著しく悪化したようだ。

そもそも今回の総選挙は、最高裁判所が憲法の規定に基づき、2002年10月までに民政移行するように命じたことにより実施された。パキスタンでは民政が腐敗しそれを打倒する軍政の出現という構図が繰り返されてきた。1999年にクーデターを起し政権の座についたムシャラフ参謀長は、その後大統領となり今日に至っている。ムシャラフ軍政が誕生したのも、シャリフ前政権までの民政下で汚職と失政が続いたことによるものであつたが、政治指導者としてのムシャラフはこれまでそれなりに良い統

治をし、支持も得ていた。ただこの選挙後も実権を握る準備を着々と進め、4月には大統領の任期を5年延長する住民投票を行い、圧倒的多数の支持を得た。ただし、公式発表の投票率と実際の投票率はかなり異なり、不正が蔓延した選挙だったとも言われている。また8月に行った憲法改正で大統領権限が強化された。反発がある中でのこれら強硬的な行動は、本来アメリカを刺激し制裁の対象となるが、テロリスト掃討作戦との関係でアメリカは黙認した。ここにアメリカの狡さと国際平和実現の阻害要因があるような気がするのだが、パキスタンにおける民政移行が形骸化する恐れを抱えての選挙であった。

パキスタンに限らずイスラムの国々では、欧米型の民主主義がなかなか根づいていない。たとえそれらしきシステムができてパキスタンのようにすぐに崩れることがある。いったいなぜなのか。そこに今回総選挙監視をする際の自分なりの課題があった。

パキスタンは言わずと知れたイスラム国家である。これまでイスラムの国へ行ったことがあり、イスラム文化には関心があったのだが、パキスタンのように歴史の中でイスラムが浸透し、その伝統が脈々と続いている国へは行ったことがなかったので大いに興味があったのだが、一方で不安もあった。一番は先ほど述べたテロである。同時多発テロ以降、カラチのような都市部で爆弾テロが多発していた。総選挙という国を挙げての大イベントで何らかの行動があるのではないだろうかと思っていた。結局は取り越し苦労に終わったが、イスラム原理主義勢力による一連の行動がイスラムに対するイメージを固定化させ、なお且つ危険な集団というイメージを持たせてしまっている。私が自分の目で見たイスラムの人々は、非常に穏やかであり、男性は紳士的であった。文化的な理由から女性とはあまり交流できなかったが、決して嫌な思いをすることはなかった。また国としての雰囲気も長い歴史と伝統が息づいており、それが現代に受け継がれていることを感じさせる。パキスタンがイスラムの全てではないことを私は承知しているが、一般的に思われているイメージと実際があまりにも乖離していることに驚いた。同時に「やはりそういうものか」とも思った。つまり何者かによって作り出されたイスラムに対する負のイメージは、原理主義者の行動の過激さなどからますます激しいものとなるが、実際はそうではなく、ほとんどの人たちが自分たちの置かれている状況を受け入れ、その中で一所懸命に生きているのだと思う。



それを強く感じたのがペシャワールという街だった。北西辺境州の州都であるこの地は首都イスラマバードから車で約3時間、隣国アフガニスタンとの国境までは約50キロである。選挙監視はそのペシャワールを拠点にして、イスラマバードの方へ1時間ほど戻ったところにあるノシェラ(Nowsheera)とそこから北に30キロほど行ったマルダン(Mardan)で行った。ペシャワールはパキスタン第三の都市と言われるだけあって、街自体が非常に大きく人も多い。それと車の排気は、街全体を霞ませるほどすさまじく、「やはりここはアジアだ」と感じた。この街にはアルカイダの残党がいると言われていた。確かにいたらしいが、街の様子は、同時多発テロ後の世界の変化に比べるとあまりにもかけ離れている。そこには普通の生活があった。

監視をしたノシェラとマルダンはそれほど大きな街ではないが、道を行く人は多く、車で少し走るとすぐに住宅地あるいは畑が広がっていた。学校を投票所としていたが、大通りに面するところがあれば、住宅地の細い路地を入っていくところもあった。印象に残っているのは、投票日当日は様々な問題が発生したが、そのひとつひとつにパキスタン特有の政治風土、あるいは政治文化を反映していることである。問題の例をいくつか挙げれば、投票者が投票に来たときに、役人が当たり前の顔をして大声でその人の名前を呼び、政党のエージェントたちはその党の候補者が届出の際に選挙委員会からもらった名簿のコピーを用いて投票者をチェックする。あるいは候補者が事前に投票者たちに配布した紙を役人に見せて名簿のチェックを受ける。その紙には名前などを書く欄がありチェックを簡素化するメリットはある。しかしそれは選挙法にその使用許可が記載されていないだけでなく、そもそも候補者が配布している点で公正さを欠くものである。明らかに選挙法違反であるにもかかわらず、特定の投票所あるいは政党ではなく、ほとんどすべての投票所において全員で行っている不正を見ていると、彼らは選挙法を読んでいないのか、あるいは読んでいても問題ないと判断しているのか、あまりにもあからさまに行うので、驚きを通り越してあきれた。女性用の投票ブースはもっとすさまじかったようである。宗教的な理由から、投票ブースは男性用と女性用に分かれていて、女性監視員はどちらにも入ることができるのだが、私のような男性監視員は女性用投票ブースに入ることはできない。そのような問題が発生しつつも「なんとかなった」のは、これまで何回も選挙を経験しているからだろう。有権者教育も特に行わ

れなかったようであり、また選挙実施を知らせる方法がウルドゥー語放送によるものだったため、パシユトウン語を話す人が多い地域においてあまり意味がなかったようである。



パキスタンにおける民主化を考えると、やはり民主主義というものはそのものが完璧なものではなくて、今現在各国で採られている政治システムの中で最良のものなのだろうと思う。ゆえに民主主義と言ってもその国によって「色」が出るのだろう。このことは常々考えることなのだが、パキスタンにおいてもこのことが当てはまる。今回の総選挙後、議会が召集され首相が選出されたが、親ムシャラフ派のジャマリ氏が首相に就任し、ムシャラフの力は議会に十分及ぶようになった。けれども、私が監視をした北西辺境州ではイスラム原理主義政党連合である MMA が勝利し、全国的にもみても大躍進した。これは当然のことながら反ムシャラフ、反アメリカと見るべきである。国民感情は、アメリカに協力するという政府の方針とは逆のところにあった。しかしイスラム原理主義を肯定しているのかと言えばそうでもないだろう。イスラム世界にとって原理主義者はやはり厄介者でしかなく、彼らによってイスラム世界全体が被ったものはあまりにも大きいと思う。ただ、議会において、MMA は政策決定過程におけるキャスティングボートを握っている。パキスタンの将来を長い目で見れば、汚職や失政を続けたとはいえ民主的な政党を選んだ方が良い。しかしパキスタンの人々にはもはやそれを考える余裕がないのかもしれない。あるいはそういった考えに至らない要因があるのかもしれない。アッラーへの祈りを捧げるということは、アッラーと共にあるという精神的支えを持ち、心を豊かにすることになるのかもしれないが、一方で信仰が神に依存することとなり、民主主義社会における政治活動という極めて自主性の高い行為にまで人々を至らせないのではないだろうか。だから選挙について関心はあっても、その意味や手続きの重要性についてあまり認識せず、結果的に無意識のうちに不正をしてしまうのではないだろうか。



私はイスラマバード空港でメッカへ巡礼に向かう一団に遭遇した。今回のパキスタン滞在中、アザーンを聞くことはよくあったのだが、祈りの時間に街にいても、そこにいる人々は祈っていなかった。内心、「いいのかなあ」と思っていたのだが、空港で見た巡礼に向かう集団に神聖なものを感じずにいられなかった。人生の中で他人と全く同じ目標があり、しかもそれは争って達成するものではないというのはなんと素敵なことだろう。そういったことをなかなか理解できない人々に代わって、私はイスラムの人々や文化について、そしてその国での民主化について考え続けたいと思う。

[▲ Page Top](#)